寺院と公共性

浄土真宗とソーシャル・キャピタル（社会関係資本）

二〇一二年十月に開催された宗門教学会議では、「公共性」をテーマに議論が行われました。その詳細は、『宗報』（二〇一三年四月号）にて報告しました。今回は、「公共性」にかかる問題の一つとして、近年、注目されている「ソーシャル・キャピタル」（社会関係資本）という観点から、寺院の問題を考えてみたいと思います。

さて、「お寺の役割とは何ですか？」そのように尋ねられたとき、皆さんはどのように回答されるでしょうか。

一般的に、お寺とは「教義をひろめ、法要儀式を行い、その寺院に所属する僧侶、寺族、門徒、信徒その他の者を教化育成し、公共の福祉に貢献することを目的[*1]」とした活動を行うところであると規定されています。しかし実際には、さまざまな社会活動や福祉活動等、幅広い活動がお寺を中心に行われています。

近年、そのような寺院やそこに携わる（たずさ）人々が、地域コミュニティにおいて潜在的に果たしてきた役割を、社会の側から学術的に再評価しようという動きが起こっています。そこでは、「無縁社会」とまで言われるほど、家族や地域、会社での人と人とのつながりが希薄化した世の中で、宗教がそのような「つながり」（社会関係資本）を「結び直す」役割として機能し、よりよい社会の創造に貢献しているのではないか、ということに注目が集まっています。

浄土真宗本願寺派総合研究所（佐々木惠精所長）・教団総合研究室でも大学などと連携しつつ、「寺院存在の持つ力や、果たしている役割」を明らかにすることを目的に、調査を始めました。

●これまでの寺院調査

総合研究所では、これまでにも本願寺派の寺院に関する調査研究と情報提供を行ってきました。全国の寺院の多様な取り組みを紹介することで、他のお寺が実際に活動する際の「ヒント」として活用していただくことなどを目指していま

す。

その成果の一部は、『寺院活動事例集 お寺はかわる――新たな始まり――』（二〇〇七年十二月刊行）や、『寺院活動事例集 ひろがるお寺――寺院の活性化にむけて――』（二〇一三年三月刊行）などに収録されており、大きな反響をいただいています。

こうした中で、教団総合研究室では新たに寺院調査に取り組むわけですが、これまでの調査との違いは一体何でしょうか。その違いを示すキーワードが、「ソーシャル・キャピタル」（社会関係資本）と呼ばれる視点です。

●ソーシャル・キャピタル

ソーシャル・キャピタル（social capital）とは、日本語で「社会関係資本」または「社会資本」とも訳されます。

この概念は、一九一五年頃にアメリカで使用されたことに始まります。その後、ジャーナリストや経済学者、社会学者などによって世界各地で研究が進みます。中でも、社会関係資本概念の普及に大きく貢献した一人として、政治学者でハーバード大学教授のローバート・パットナム氏が挙げられます。

パットナム氏の有名な著書『孤独なボウリング――米国コミュニティの崩壊と再生――』（原著二〇〇〇年、日本語訳二〇〇六年刊行）では、社会関係資本について、「社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範」と定義されています。換言すると、人と人、人と社会との「つながり」や「絆」、そしてそこから生じる「お互いさま」「持ちつ持たれつ」といわれるような関係性を指しています。大ざっぱに言えば、私たち一人ひとりと近隣住民や職場などのさまざまな人びととの良好な関係を結ぶ要素とも言えるでしょう。[*2]

注目すべきは、そうした社会関係資本が、社会の効率を改善することで、我々の生活をより豊かなものにするとされることです。

あくまで例えですが、私たちの研究所内には、さまざまな調査業務のために、膨大な数の書籍や資料が保管されています。それらの中には、各研究員の個人的な所有物も含まれます。そうした中、研究員同士でそれらの書籍の貸し借りが日常的に行われます。本によっては、一冊、数万円もするものもありますから、必要なたびごとに個人で購入することなどできません。故に、互いに貸し借りをしながら、助け合って勉強しています。当然と言われるかもしれませんが、そこに代金は発生しません。互いの「信頼」関係が構築されていることで、お互いに必要なときに貸し借りをすることができるのです。もし、本の貸し借りのたびに、お金のやり取りが発生するならば、それは効率の悪い間柄と言えましょう。研究所内では、信頼のあるつながりがあることで、持ちつ持たれつの「互酬性」の関係性が成立しているのです。

こうした良好な人間関係を、地域や国、世界単位で実現するためには、どうした

らよいのか、そのことを思考するのが社会関係資本の議論です。

パットナム氏によると、こうした社会関係資本の基本概念には、①「橋渡し型」と②「結合型」という大きく二種の類型が存在するとされています。

①橋渡し型

橋渡し型は、「潤滑油」のように「異質な者同士」を結びつけるものを指します。社会貢献のために、さまざまな人々が集まるNPOや市民活動などのネットワークは、その一例です。

寺院で行われる「盆踊り」や「子ども会」など、ご門徒の枠を超えて地域住民が集まる活動などは、同様のものとして考えられます。盆踊りを通して知り合った人々が、お寺を超えてつながっていく、そのようなあり方は、まさしく橋渡し型に該当します。

このように、橋渡し型は、友人の友人を介して関係が拡大するなど、自分の所属団体を超えた社会関係へのアクセスが可能であるという特徴があります。しかし、互いの絆を頻繁に確認しない場合には、関係が弱まることもあるとされます。

②結合型

一方、結合型は、「接着剤」のように何かに所属する「同質な者同士」が結びつくものを指します。商工会や消防団、職場や組合などの組織などが、その一例として挙げられます。

再び寺院の例で考えるならば、主にご門徒を対象に開かれる「法要」などがそれに該当するでしょう。同じ信仰を紐帯とした者同士が集い、互いの関係が深まるようなあり方は、まさに結合型と言えます。

結合型は、人間関係の安定性や強い信頼をもたらす一方で、集団として閉鎖的になる傾向にあるとされます。他者に対して排他性を帯び、外部からの新しい情報などを遮断してしまう場合など、負の可能性も指摘されます。

いずれにしても、これら橋渡し型と結合型は、どちらか一方に峻別されるものではありません。社会関係資本のさまざまな形態を比較する際の、あくまで傾向を示すものです。

社会関係資本の定義をめぐっては、論者の立場や問題意識によって、相違がみられます。しかし、社会的、文化的、経済的によりよい人間関係の構築のためには、社会関係資本が必要である、という認識については軌を一にしていると言えるでしょう。

● 社会関係資本がもたらすもの

社会関係資本論では、さまざまな組織や集団の基盤にある「ネットワーク」や「信頼」、そして「互酬性の規範」が強固なところでは、人々の「支え合い行動」が活発化し、社会の色々な問題も改善されることが指摘されます。

その一例として、『ボランティア僧侶――東日本大震災被災地の声を聴く』（教団総合研究室長・藤丸智雄執筆、二〇一三

年三月刊行）に、被災地で研究員が、直接、ある被災者の女性からうかがった次のような実話が挙げられます。

その女性は、夫が関東に単身赴任中、息子さんと仙台で暮らす中で、震災に遭われました。震災直後、ライフラインが停止する状況で、六歳の息子さんが風邪をひいてしまいます。物が買えない状態では、薬も手に入りません。女性は、途方に暮れてしまったそうです。しかし、石油ストーブをお持ちのご近所の方が、息子さんをそのお宅で寝かしつけてくださいました。さらに、ご近所の方々が、息子さんのために薬を集めて回ってくださったそうです。この出来事が嬉しくて、その女性は、自らもボランティアとして活動を始められたとのことです。

このエピソードは、「ご近所さん」というネットワークが、支え合い行動を可能にした一例と言えるでしょう。女性がその後、ボランティアとして活動を始められた様子は、まさにつながりが新たなつながりを生み出したものと受け止められます。

また、社会関係資本が豊かな社会は、効率性がよいとされ、かかる費用なども少なく済むことが指摘されます。

具体的には、警察の例で考えるとわかりやすいかもしれません。すなわち、人々の信頼が厚いコミュニティでは、必要以上に監視を強化する必要がありません。人と人とのつながりがあり、信頼関係が強固な地域では、そうでない地域と比べて、警察の介入を必要としないのです。故に、警察機能を維持するための費用も安く済みます。このように、社会関係資本は、社会効率の向上に寄与するのです。

さらに興味深いのは、社会関係資本が、人々を「利他的」「愛他的」な行動に導く傾向にあるとされることです。

『孤独なボウリング――米国コミュニティの崩壊と再生――』では、ある会計士の男性が、ボウリングを通じて知り合った別の男性が病気を患い支援が必要なことを知り、〝無償〟で支援を申し出るという逸話が登場します。見ず知らずの相手であれば、無償の支援など、なかなか成立し難いでしょう。しかし、「共にボウリングをする」という「結びつき」、またそこで培われた二人の「絆」によって、会計士の男性の支援が生まれたとされます。

このように、社会関係資本は自己犠牲を払っても、相手のために尽くすという利他的・愛他的な行為を伴うことが多いと言われています。

他にも社会関係資本は、人々の寿命や健康、犯罪発生率や政治参加、さらにはボランティア活動などとの相関関係が指摘されます。故に、世界各国が社会関係資本に関心を示し、社会政策に生かそうと努力しています。

日本でも、内閣府が二〇〇三年と二〇〇五年に社会関係資本に関する調査を行い、その成果は『ソーシャル・キャピタル――豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて』（二〇〇三年刊行）と『コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピ

タルに関する研究調査報告書』（二〇〇五年刊行）にまとめられています。

●宗教と社会関係資本

宗教は、社会関係資本を醸成する源泉として機能しうるのか。教会や寺院、神社などが地域社会における人々の協調行動を促進させ、社会効率を改善することで、コミュニティ機能の創造と再生の役割を果たしうるのか。そのような問題意識から、アメリカを中心に宗教と社会関係資本に関する研究がなされてきました。

そこでは調査を通して、信仰心を持つ人々や、宗教活動への参加に積極的な人々が、自身の信徒団体の枠を超えて、慈善活動やボランティアなどに対して、積極的な傾向にあることが示されています。そのことを受けてパットナム氏は、「宗教的な人々が類い希なる積極的な社会関係資本家であることは明らかである」[*3]とまで述べています。

さらに、宗教的理想が、潜在的に利己的であることを戒め、他者に対する献身性を促すことも指摘されます。つまり、多くの宗教が本来的に持ちうる〝利他性〟が、社会関係資本の醸成をより促進しうるということです。

これらはあくまでアメリカでの調査ですから、その結果をそのまま日本の宗教に適応することはできません。しかし、同様の目的意識のもと、「宗教と社会関係資本」をテーマとする研究は、すでに日本でも始まっています。その最新の研究成果は、『叢書 宗教とソーシャル・キャピタル』（全四巻、二〇一三年刊行）などに詳しく論じられています。

ちなみに、そのシリーズ第三巻では、「教誨師と更正活動」（金澤豊・真名子晃征執筆）、また「自死対策における宗教者の役割」（宇野全智・野呂靖執筆）と題して、当研究所の研究員が執筆を担当しています。ご興味をお持ちの方は、是非、ご一読いただきたいと思います。

●教団総合研究室における調査

教団総合研究室（藤丸智雄室長）は、二〇一二年度から実施された宗門の機構改革に伴い、総合研究所内に新設された研究部門です。

総合研究所の規定上（宗則第一三号）、当研究室では主に、①宗門運営に関する現況調査、②他の宗教団体の調査分析、③宗門教学会議の運営、④六条円卓会議の運営などに取り組むことが規定されています。

そのような中、①宗門運営に関する現況調査の一環として実施しているのが、社会関係資本の観点を中心とした寺院調査です。この調査は、龍谷大学や北海道大学などとも連携しつつ行われています。当研究室の調査はまだ始まったばかりです。これから確実に研究を蓄積する必要があります。

しかし、そうした手探り状態の中からも、見えてきたことがあります。昨年度

に実施した、ある過疎地域での調査では、寺院がそれぞれの所属する地域社会の中で、「信頼」や「絆」を生み出す循環機能の一部として機能していることが浮き彫りとなりました。そこでは、寺院が社会関係資本を創出するためには、寺院そのものの信頼やネットワークが不可欠であることもわかりました。すなわちそれは、お寺に所属する一人ひとりが「つながり」を有し、「信頼される存在」であってこそ、新たなネットワークや信頼を生み出すことが可能であるということです。

寺院が良好な社会関係資本の源泉となりうるために必要な「要素」とは何か。そのことについて、これからも調査する必要があります。

●まとめ

『宗制』では、「阿弥陀如来の智慧と慈悲を伝え、もって自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現に貢献する」ことが明示されています。阿弥陀如来は、「十方衆生」と、あらゆる存在に対して願いをかけておられます。同様に「自他共に」とは、お念仏をいただく私たちだけでなく、「社会のあらゆる人々と共に」という意味で受け止められます。

あらゆる人々が心豊かに生きることができるために、お寺を中心とする私たちにできることとは何でしょうか。その可能性を見いだす視点の一つとして、「社会関係資本」が考えられます。

社会関係資本は、経済資本などと異なり、あらゆる人々に開かれた、誰もがアクセス可能なところにその特徴があります。人々の意図的な働きかけによって、「信頼」や「つながり」はさらに醸成されることが可能となります。

これまで寺院は、法要や子ども会、盆踊りなどの既存の活動を通して、地域社会の基盤づくりに貢献し、人と人とを結びつける役割を果たしてきました。まずはそのことが評価されなければなりません。その上で、各寺院がそのようなネットワークや信頼、互酬性の規範を生み出す役割を果たしうることをさらに意識した活動を行うことで、一層、社会に貢献できるのではないかと考えています。

寺院がより一層、社会関係資本を創出するために必要な「要素」とは何か。そのことを模索するために、当室では今後も調査を継続して参ります。

なお、本年九月十二日に、「宗教と公共性――自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現にむけて――」と題して、左記の通り、公開講座を開催する予定です。発題者には、NHK教育テレビ「ハーバード白熱教室」のマイケル・サンデル氏（ハーバード大教授）と親交が深く、番組の解説も務めておられる小林正弥氏（千葉大学教授）をお迎えいたします。また、コメンテーターには、『孤独なボウリング――米国コミュニティの崩壊と再生――』の訳者柴内康文氏（東京経済大学教授）にご登壇いただきます。ご興味をお持ちの方は、是非この機会にご参加いただき、「寺院と公共性」に関する学

びを深めていただきたいと思います。

（本願寺派総合研究所研究助手　菊川一道）

研究所ホームページ http://j-soken.jp/

---

1 「寺院規程」第3条

2 社会関係資本は、必ずしも手放しで賞賛できるものではありません。なぜならば、それは社会において、むしろ負の結果をもたらすこともあるからです。

社会関係資本には、組織や人的ネットワークのことを含みます。もし、それらに所属するメンバーが、互いに協調的に行動していたとしても、反社会的な行為を行う場合などは、そのつながりは、社会において有益とは言えません。

しかし、同様の事態は、反社会組織のみならず、私たちの日常においてもみられます。同じ価値観などを共有できないものに対して課される、人間関係の断絶や、他者に対する不寛容な態度は、社会関係資本がもたらすネガティブな面に該当します。

このような組織やネットワークは、信頼とは真逆の「不信」という負の要素を醸成してしまうこともあります。パットナム氏は、そのような可能性を、「社会関係資本の暗黒面」と呼んでいます。

このように、社会関係資本は社会全体にとって、必ずしも利益ばかりをもたらすとは限りません。ときに、不祥事の温床ともなりえます。社会関係資本は、その有益な側面ばかりに注目が集まりがちですが、「諸刃の剣」であることに注意が必要です。そのことに留意した上で、その有用性を高めるにはどうすべきかを、議論しなければなりません。

3 『孤独なボウリング――米国コミュニティの崩壊と再生』（原著二〇〇〇年、日本語訳二〇〇六年刊行、柴内康文訳、柏書房）、七四頁

◉ 公開講座のご案内 ◉

【テーマ】

「宗教と公共性――自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現にむけて――」

【目　的】

「自他共に心豊かに生きることのできる社会」とはどういう社会か。そして、そこで寺院がいかなる役割を果たしうるのか。その内容を明らかにすることを目的とする。

【開催日時】

2013年9月12日（木）　午後1時～2時55分

【開催場所】

西本願寺聞法会館

【発題者】

小林正弥（こばやしまさや）（千葉大学大学院教授）

〈コメンテーター〉

柴内康文（しばないやすふみ）（東京経済大学教授）

※申込み不要